

## 日本生物診断研究会を設立-生物の能力で早期診断

07面



瀬戸代表理事

東京大学消化管外科学の瀬戸泰之教授、国立成育医療研究センターの五十嵐隆理事長、癌の早期診断法「N-NOSE」の開発を手がけるベンチャー「HIROTSUバイオサイエンス」（ヒロツバイオ）代表取締役の広津崇亮氏は、生物が有する能力を診断技術に応用することを目指した「日本生物診断研究会」（JSBD）を設立した。N-NOSEで用いる「線虫」など、高性能センサー機器では診断が難しい早期段階の疾患に対して、生物の能力を生かした診断技術を研究会などで紹介し、社会的な啓発を進めると共に、実用化を想定し、診断技術を評価するための臨床試験をどう行うべきか、エビデンス構築を目指していく。

病気の早期診断をめぐるのは、高性能センサー機器の開発、改良が行われてきたが、それでも性能面で限界があり、癌などの診断では早期発見が難しい現状にある。同研究会では、生物の嗅覚など従来の診断機器では捉えられない早期の癌を判別する新たな診断技術として応用していく社会の実現を目指している。

広津氏が開発した線虫を用いて尿中の癌の匂いを識別する技術「N-NOSE」は、癌の早期診断法の実用化に向けた臨床研究で、癌患者の陽性率86.8%、健常者の陰性率95.2%とする高い感度を示す結果が得られており、安価で侵襲性がない1次癌スクリーニング検査としての実用化できる可能性が膨らんでいる。

JSBDでは、企業や研究者に対して会員を募り、今後運営していく。生物の能力を生かした診断技術をより広く認知してもらえよう、各疾患の専門医らが中心となり、将来的な実装に向けた学術講演会や年次研究会を通じた研究成果の発表、生物診断の産官学共同プロジェクトの推進、社会に向けた啓発活動などを行う。来年春には第1回年次研究会を開催する予定だ。

代表理事に就任した瀬戸氏は9日、都内で会見を行い、「エビデンスを確立させるための臨床試験の様々なアイデアをつくっていかないといけない。その立ち上げの場になればと考えている」と抱負を述べた。臨床現場で新たな診断法として使われるためには、「既存の検査法との比較試験も必要となってくる」との見通しを語った。

一方、「N-NOSE」の発見者として理事に就任した広津氏は、「世の中ですごい能力を持っているのは、線虫だけではない。癌以外の疾患で、他の生物を活用できる可能性は十分ある」と述べ、線虫が実用化された後には、JSBDとしてその他の生物にも着目し、早期診断技術としての可能性を検討していきたい考えを示した。